

スタイルにおける革命：風変わりな織部（17世紀初頭）

美濃焼の中でも、織部焼と呼ばれる独特のスタイルが生まれたのは、17世紀初頭のことだ。それまでの日本の陶磁器のデザインは、中国や韓国のように対称性やバランスを重視していた。対照的に、織部では、形や配色に非対称性が見られる。作品の縁や胴体をわざとねじって、世界に一つだけの作品を作っている。また、深みのある銅緑をはじめとする豊かな釉薬や、自然をモチーフにしたものが多い。

織部の名は、茶人・千利休（1522-1591）の弟子であり後継者である古田織部（1544-1615）に由来する。織部は自分の名を冠したこのスタイルの陶器を好んでいたとされているが、それを明確に示す記録はない。しかし、織部の陶器は、日本の茶道の、不完全なものを美しいとする今日の芸術への進化に強い影響を与えた。

茶道の影響を受けて、織部の人気も高まったが、織部の優位性は長くは続かなかった。古田織部が亡くなるまでの約30年間しか生産されておらず、その間に茶道の美意識も変化していったのである。しかし、現代の陶芸家の中には、いまだに織部のスタイルで作品を作る人もいる。

織部は、釉薬の色で細かく分類されることが多い。今回の展示では、青織部、鼠織部、黒織部、赤織部、総織部（モノクロ織部）などがある。